

俳聖・正岡子規を育てた

# 外祖父・大原観山と叔父・加藤拓川

元松山市素鷲小学校校長  
伊予史談会会員

上岡 治郎

## 一、子規100年祭に想う

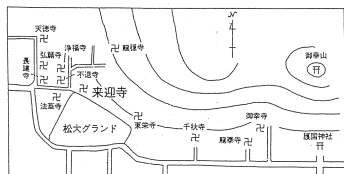
今年の子規没後百年ということで、松山市でもいろいろな行事が企画されている。そして来年の平成14年は、松山城築城開始四百年という記念の年でもあり、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」を軸とする21世紀の松山のまちづくりにも、市民参加が考えられている。そのため私も子規の生い立ちをたどりながら、子規の学問や、その人間形成に力を尽した外祖父の大原観山と叔父の加藤拓川について調べることにした。

## 二、大原観山先生の墓

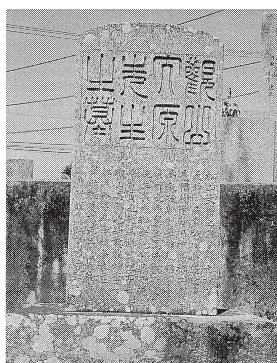
城北寺町の来迎寺境内には、大原観山・足立重信・青地林宗の墓を始め、露兵墓地などがある。



(右) 観山大原先生之墓  
(左) 大原家之墓



城北寺町にある寺院名



観山大原先生之墓  
明治8年4月11日没(享年58歳)

### ①墓表を読む

私が大原観山先生の墓参を始めたのは、昨年の秋からである。そして、松山築城の普請奉行・足立重信公の墓参の帰り、初めて来迎寺の境内を通り抜けて、山際の観山先生の墓を見つけた時の感激は、今でも忘れる事が出来ない。それからと言うもの、大原観山

加藤拓川―正岡子規の三人のつながりや共通点を深く掘り下げてみたいと考え、そのために、この墓石のまわり四面に彫られた九百五十文字あまりの漢文による墓表を読み解くことにした。

### 「観山先生墓表」

松山文学の興るは、文政中に助まる。是の時、爽肅公英邁の資を以て儒術を崇尚し、首として日下・高橋の二先生を挙げて教授となし、新たに学館を創めて人材を陶鑄す。群英ここに於て輩出せり。其の尤も粹なる者は三人、伊藤子誠・武知伯慮及び大原先生、是れなり。先生は年最も少くして尤も聡敏なれば、公と二先生は俱に奇として之を賞せり。……

なお、この撰文の作者は藤野正啓であるが、長文であるため以下を要約して載せる。

明教館を創設した11代藩主定通公や恩師の目下伯巖・高橋復斎・歌原松陽の諸先生に認められた観山先生は、天保9年、21歳で江戸の昌平黌に入る。

学ぶこと数年、学成つて帰藩、藩校助教となり、教授となる。

また幕末に至つて藩の世子松平定昭公の側用達任に任せられ、よく補佐して維新前後の松山藩の動向を誤らせなかった。

更に先生は、性行謹厳、思慮周密、博覧強記の大教育者であり、藩校明教館の生証人でもあった。

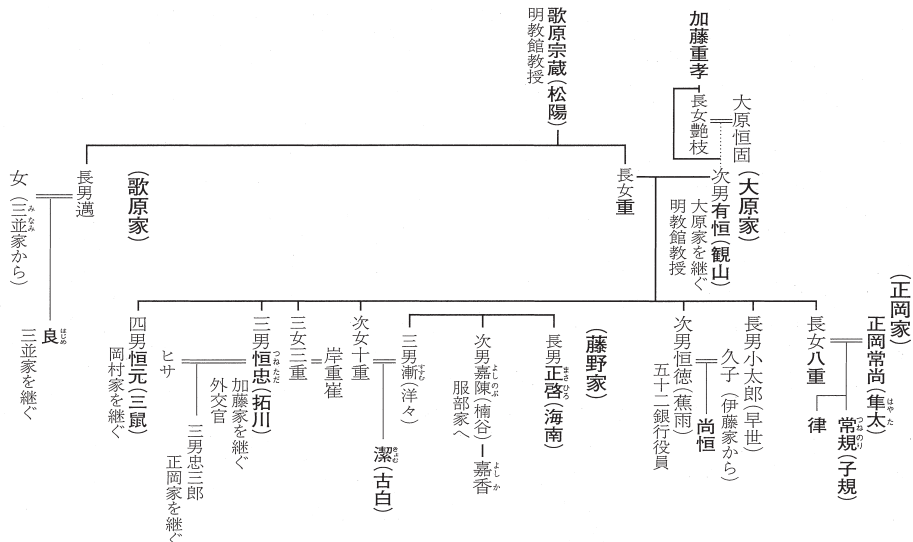
### ②大原家の墓を来迎寺に移す

加藤拓川市長が大正12年3月に書いた文章によつて、その心情が読み取れる。市長の死はその月の26日である。

### 〈加藤市長の文章〉

「…先考(亡父観山)の歿して茲に四十有九年、…(中略)…尚恒(観山の後を継いだ恒徳の子)と謀り、其の墓を山越の来迎寺に移し、将に明春を期して見孫相集まり、五十年祭を行はんとす。……」

### ③大原観山一族の家系図





### 三、子規の育った家

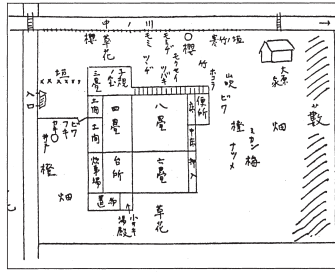
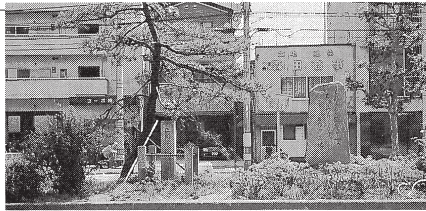
#### ① 正岡子規誕生地の碑



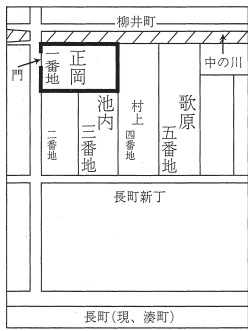
慶応3年9月17日、伊予国温泉郡藤原新町（現、松山市花園町3番5号）で、松山藩御馬廻加番、父正岡常尚と母八重（大原観山長女）の長男として誕生する。（太陽暦では10月14日）

#### ② 正岡子規生い立ちの家跡

藩政時代には、中の川の清らかな流れの北側に沿って長町新丁と呼ぶ一筋の士族町があった。そし



「正岡家」の拡大図  
(妹の律が作図)



※子規が2歳から加藤拓川の世話で東京に遊学する17歳までを過ごした家の跡

て子規が生まれた翌年、藩主の令により「子規生い立ちの家跡」の碑のある場所に移転。そして、その年に火事のため門を残して全焼、家を建て替える間、親戚の世話になるが、父常尚は明治5年3月7日新しい家で病死する。40歳という若さであった。

そのため子規は、以後外祖父大原観山や、叔父加藤拓川の世話になることとなる。

なお、大原観山の遺稿集の中に、観山が中の川のこの家に泊まった時の詩があるので紹介する。

#### 正岡外孫の家に宿す

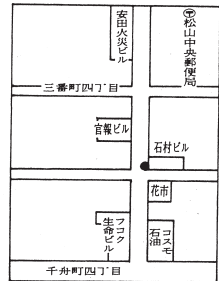
眠り醒めて 夜将に半ばならんとし  
漸く群動の囂しきなし  
橋頭には 履響絶え  
籬外には 水声高し  
蟠屈して 香篆を画き  
嘯吟して 煩毛を拭き  
人間 閑静の楽しみは  
究めて 是れ 吾が曹に属す

「外孫」とは正岡子規のことであり、この時の子規は満6歳であった。また、「水声」とは中の川のせせらぎのことである。なお、上左の図面にある三番地の池内氏は虚子の生家であり、五番地の歌原氏は子規の再従兄三並良の生家である。



明治7年の  
正岡子規

### 四、大原観山邸跡



大原観山邸の事は加藤拓川がくわしく書いているので、その文章を最後に載せることにして、ここでは後にドイツ文学の大家となった三並良の思い出の文を載せる。

#### 「子規の少年時代」 三並良

：私達は子規には祖父、私には伯父に当たる大原観山先生に素読を教わるようになって、毎朝五時頃、相携えて先生の所へ行つた。

先生は家塾を開いて居て、他の子供には門人が教えて居たが、子規と私には自ら教えた。

先生は升（子規の幼名）は初孫で可愛いから教える。幸（私の幼名）は松陽先生（私の祖父で矢張り漢学者）の孫だから、御恩報じのために教えると言つて居られた。（以下略）

子規が三並良と一緒に三番町の大原観山私塾へ通うようになったのは、明治6年、子規7歳の時であるが、この年に子規は法竜寺内の末広学校に入学している。なお観山は子規の利発を愛し、明治6年〜7年にかけて、大いに子規を訓育し、学問の進展を図る。そして、観山が松山市三番町48番地の自宅で病没したのは明治8年4月11日で、享年58歳であった。

### 五、子規母堂令妹邸跡



①子規の育った家  
②母堂令妹の家  
③大原観山邸

外祖父大原観山が亡くなり、子規が東京に遊学したあと、子規生い立ちの家を売って、そのすぐ近くにある大原家屋敷内に移る。その移転の日は明治21年5月14日であり、新しい二間の家は、大原家が子規の母八重と妹律のために新築してくれたものである。なお、夏目漱石が明治25年8月中旬に、帰省中の子規を訪ねて、この家に来宅している。

# 俳聖・正岡子規を育てた外祖父・大原観山と叔父・加藤拓川

Kanzan Ôhara & Takusen Katô

## 六、市長時代の加藤拓川

### ①相向寺にある拓川の墓

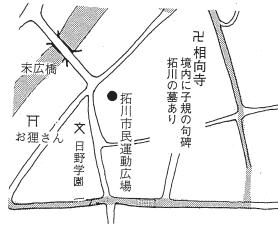
第五代松山市長加藤恒忠は、石手川をこよなく愛し、石手川の名前をとって「拓川」と号した。

そして、①石手川の公園化②市民のために松山城地の払い下げ③旧制松山高等商業学校(現・松山大学)の創立など、松山を生き甲斐のある町にするために癌という不治の病を抱えながら奮闘したのである。

そして親交のあった相向寺の住職に「死んだら、石手川に近いこの寺に骨を埋めてほしい」と約束し、市長在職11か月余で、最後は絶食36日、しかも病床を見舞う友



(右)相向寺山門  
(左)「加藤拓川骨」の墓



と談笑し、死ぬる数時間前まで筆を執って詩を書くという、正岡子規にも比すべき臨終であった。

今、相向寺の大いちょうの下に「加藤拓川骨」と六代目市長岩崎一高の筆になる墓が建てられているが、町名変更の時、町民がこぞって「拓川町」と名付けたのも、ゆかしいことと思うのである。

ところで、この文章のしめくくりとして、拓川の書いた「思出の記」の全文を載せる。

これは、明治維新で禄を離れた当時の士族の苦しい生活を回顧しながらも、父観山と息子拓川の心の綾が美しく表現されており、正岡子規の「故郷」の「世に故郷程こひしきはあらず。……」の文章とどぶつて、大原観山―加藤拓川―正岡子規の文学的伝統のすばらしさを感じずにはおられない。

## 七、「思出の記」加藤拓川

余十七歳の時父に別れ、遺命によりて松山を出でしより、殆んど五十年の生涯を異郷に過ぎたる末、図らずも帰郷を余儀なくせられたる際、宛も県官舎竣工したれば、多年歴代内務部長の住宅なりし三番町の破屋を借受けてこれに入れり。

此家余少時の旧宅にして、我父は此家に歿し玉ひ、余其年始めて故郷を飛出し、四十八年を経て、再び此家に帰住するは、偶然ながら何等かの因縁なるべし。

此家五十年前は、近隣に秀でて目星しき家なりしに、今は一本の柱、一枚の障子も直なるものなく敷も構も皆曲りて、梅雨の大もりに、家人の苦情限りなし。

無心の死木さへ、年立てば欺く朽果つるものを、我身の老朽は当然の事なりと、始めて人生の果なきを悟るも愚なり。

更に懐旧の情を惹起するものは、庭前の老桜なり。我父は明治七年の冬より床に就きたまひ、八年の春病勢漸く進み、屢々我等にむかひ「桜はいつ咲くだらうか」と問はれたまへり。

四月最初蕾の綻び初むるに及びて、臥床を庭前近き所に移させたまひ其、十一日の昼落花を眺めつつ、五十八歳を一期として、すやすや眠るが如く逝きたまひぬ。

余は我父よりも六歳の長寿に達して市長となり時局の大事を余所に見て、田舎の辻便所、塵芥場等のために、浮身を憂すべき運命に陥りしは、をかしくも、又恥ずかしき事どもなり。

又一の思出は、我父が永年愛したまひし古銅の手洗鉢が、今も依然として、余が帰来を待ちたる如く、昔の場所に安居せることなり。

明治六年の暮なりしと覚ゆ、余は我父の御肩をたたきける時、唐人町の田中金兵衛つかつかと入来り「先生、利息だけでも貰ひませう」と申しければ、父は少しく当惑の態にて「金兵衛に誠に申訳なけれど、此暮はマダ餅も搗き得

ず、小供の紙鸞買てやる銭さへもなし、春になれば乾度幾分を納むべければ、暫く我慢してくれ」と言はれし、暫く黙止したる金兵衛は、突然立って手洗鉢の水を庭に投放して「風や餅は此方に関係なし、私は之でも戴いて行きます」と周囲六尺に余る銅盤を両手に抱へて去れり。

父は母にむかひ「金兵衛は淡白な男ぢやノー」と笑いたまひ、我母は黙して納戸に入りて、独り泣きたまへり。

程なく我弟は外より帰り来りて「とと様、早く風買て下さい」と迫れり。其翌日元旦雑煮の味のまづかりしこと、今も忘るる能はず。欺くて余はいかにしても、手洗鉢を取戻して、我父を慰め奉らんと思ひしものから、昼は米を搗き、夜は単語篇(小学教科書)を写し、数ヶ月の後見事田中屋より手洗鉢を持帰らるるに、我父不興の御顔色にて「誰に頼まれてそんな事をした、そんなケチナ根性で、行末出世ができると思ふか」と痛く余を叱りたまへり。

当時米搗賃一白式錢五厘、単語篇写字料一部七錢にて、筆紙の代を引けば参四錢の利益なりし、今更思へば是も哀れなる思出の種なりけり

(十一年七月二十五日高浜にて、此夜迅雷風雨不眠)

加藤市長が市長就任二か月後に書かれたこの文章は、伊予史談会の機関誌に掲載され、一般の人の知るところとなつたのである。